



暮らす、生きる。

# 阿智家族

暮らす、生きる。  
阿智家族

総合版

2016.1★発行／阿智村役場 協働活動推進課 定住促進係 〒395-0303 長野県下伊那郡阿智村駒場483 Tel.0265-43-2220

総合版



平成26年築、阿智村国原(村営住宅)  
語れる夢があること、支えあえること、分かち合う場所があること、  
朝を楽しみに眠れること。阿智に暮らすということは、村ごと大きな家族になること。  
暮らしている人も、暮らしたい人も。  
この村で建てる、探す、直す、働く、増やすを応援します。

2016年4月1日からの定住者支援・補助一覧 詳しくは「阿智村役場 定住促進係」までお問い合わせください。

家をたてる	
対象	阿智村に定住目的で宅地や空き家を取得、住宅を新築または増改築する20~40歳の方。
補助額	<p>①宅地・空き家の取得 【補助率】取得価格の3分の1 【限度額】 ..... → 100万円</p> <p>②住宅の新・増・改築 【補助率】建築工事費の10分の1 【限度額】 A新築 ..... → 100万円 B新築 ..... → 120万円 (村内事業者との請負契約、または建築にかかる2業種以上で村内事業者が工事を施工しその工事費が100万円以上かつ1業種が30万円以上の場合) C増改築 ..... → 50万円 D増改築 新築Bの条件の場合 ..... → 70万円</p>
対象	20~40歳の定住者へ 若者定住促進のための住宅新增改築等支援金
対象	41~50歳の定住者へ 集落定住者維持のための住宅新增改築等支援金
補助額	<p>①宅地・空き家の取得 【補助率】取得価格の3分の1 【限度額】 ..... → 70万円</p> <p>②住宅の新・増・改築 【補助率】建築工事費の10分の1 【限度額】 A新築 ..... → 50万円 B新築 ..... → 70万円 (村内事業者との請負契約、または建築にかかる2業種以上で村内事業者が工事を施工しその工事費が100万円以上かつ1業種が30万円以上の場合) C増改築 ..... → 25万円 D増改築 新築Bの条件の場合 ..... → 45万円</p>
内容	分譲住宅地造成事業

暮らす、生きる。  
阿智家族

〒395-0303 長野県下伊那郡阿智村駒場483  
FAX0265-43-3940 http://www.vill.achi.nagano.jp

家をさがす・なおす	
内容	村内各地区で約200戸の村営住宅を運営しています。
【物件】	間取り:1K~3LDK 家賃:3,000円~35,000円(平均20,000円前後) 築年:昭和44年~平成26年
【条件】	一部住宅に所得制限・世帯専用住宅あり。連帯保証人2名必要。 税および公共料金などに滞納がない、地域活動に参加すること。
村営住宅	
空き家情報	
内容	阿智村の販貸借、売買可能な空き家について「阿智村空き家情報」として情報発信を行います。 (物件の販貸借、売買については、当事者間の自由契約に委ねます)
対象	阿智村空き家情報活用制度の空き家データベースに登録された、 貸し出したい物件に対し、不要物処理等または空き家の簡単な改修 にかかる経費を補助します。
補助額	<p>①所有者/家財道具等の運搬および処分・屋内および屋外の清掃 【補助率】10分の1 【限度額】 ..... → 20万円</p> <p>②定住者/台所・浴室・便所・洗面所等の改修、 内装・屋根・外壁等の改修 【補助率】10分の5 【限度額】 ..... → 50万円</p>
対象	村内の物件所有者へ 定住者へ ぬくもりの田舎暮らし 推進事業補助金
農業ではたらく	
対象	45歳までの就農者へ 新規就農者支援事業
融資額	阿智村で新規に就農される45歳以下の方。 【条件】単年度貸付。最大3年間融資。 ◆認定農業者になった場合 ..... → 1年間120万円(無利子) ●初年度120万円の返済免除
研修制度や 家賃補助もあります。	
仲間をふやす	
対象	集落へイターン受け入れ集落支援金
補助額	●集落に対して 【限度額】 ..... → 5万円
対象	成長段階に応じた様々なお子様への支援を用意。関係機関が連携して取り組んでいます。(例:医療費は高校生まで無料)
内容	子育て環境支援
内容	ハローワーク求人情報

阿智村への“定住”に関するご相談・お問い合わせはお気軽に  
定住促進係まで  
☎0265-43-2220 (内線 513)  
teijyu@vill.achi.nagano.jp



語れる夢があること、支えあえること、分かち合う場所があること、朝を楽しみに眠れること。

阿智に暮らすということは、村ごと大きな家族になること。

暮らしている人も、暮らしたい人も。阿智家族。

暮らす、生きる。  
**阿智家族**

暮らしたい、暮らしつづけたい村。

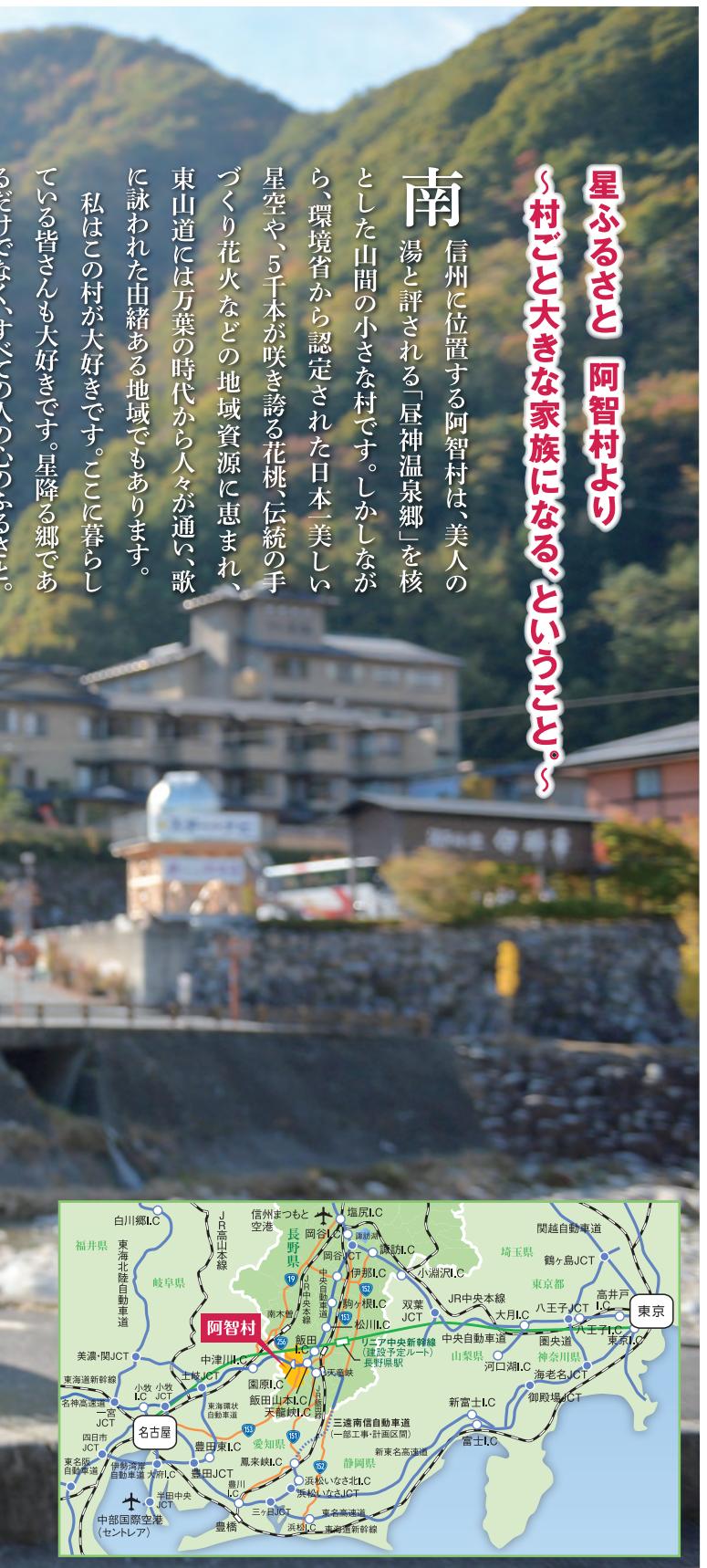
いま暮らしている人もこれから暮らしたいと考えている人も、観光や仕事で村を訪れる人も…。阿智村に関わるすべての人には大きな家族である。

『暮らす、生きる。阿智家族』という定住促進スローガンに託したのは、そんな温かなつながりと共に生への決意でした。

ロゴマークには、花桃を思わせる色彩を

背景色に選びました。

定住促進は、村外の方だけを対象とした施策ではありません。住宅新增築等の支援金をはじめ、村営住宅の運営や空き家改修等の補助金、就農など、「阿智村で暮らすこと、生きることの礎(いしづえ)」を広くバックアップしています。



## 星ふるさと 阿智村より

～村ごと大きな家族になる、ということ。～

南

信州に位置する阿智村は、美人の湯と評される「星神温泉郷」を中心とした山間の小さな村です。しかしながら、環境省から認定された日本一美しい星空や、5千本が咲き誇る花桃、伝統の手づくり花火などの地域資源に恵まれ、東山道には万葉の時代から人々が通り、歌に詠われた由緒ある地域でもあります。

私はこの村が大好きです。ここに暮らしている皆さんも大好きです。星降る郷であるだけでなく、すべての人の心のふるさと。それが、この阿智村なのです。

この地域に暮らす人だけでなく、これら暮らしたい人や訪れた人も、みんなが『阿智家族』として夢を語り、分かち合い、支え合い、村ごと大きな家族になりたい。そんな想いで村づくりを、住民自治を高めていきたいと考えています。

約10年後にはリニア中央新幹線、三遠南信自動車道によって、この村は首都圏・中京圏から1時間以内で結ばれます。

星々が何万光年の歳月を超えて輝くように、阿智村もまた歴史のステージに新たな輝きを刻んでいきたいと思います。

阿智村長 熊谷秀樹

## CONTENTS

- 02 星ふるさと 阿智村より  
～村ごと大きな家族になる、ということ～  
阿智村長 熊谷秀樹
- 04 小塚英且さん 品川雄さん
- 06 下原大介さん
- 07 小池忠臣さん
- 08 高坂友三さん
- 10 本柳寛人さん
- 11 佐久間智子さん
- 12 金子智行さん
- 13 河合一成さん
- 14 井上晶子さん



同じところなら、  
おもしろいことができるかもしない。と  
ここに移り住むことを決めました。

農業といつても、いろいろなやり方や  
暮らし方があることを知つてほしい。



## 阿智家族

ひでかつ  
小塚 英且さん(34)Ⓐ  
品川 雄さん(34)Ⓐ

阿智村伍和地区で農業を営む小塚英且さんと品川雄さんは、大学の同じサークルで知り合った仲間。とはいっても、阿智村はおろか南信州に縁のなかつたふたりが、なぜここに移住して農業を始めたか。ようと考えたのだろうか。

### 山小屋で働きながら見えてきたこと。

「僕が農業研修を行ったのは、大分県でした。農業実習をしながら九州全域から広島あたりまで就農で探しましたが、どうも見つからない…。そんなとき、阿南町に別荘のある知人がお知り合いを通じて阿智村役場を紹介してくれたんです。他の市町村ではさんざん資金について尋ねられたり、営農の難しさを説明されたりでしたが、阿智は担当の方が寛大だったのかな…。それに、有機農法で指導を仰げる環境で

小塚 「僕が農業研修を行ったのは、大分県でした。農業実習をしながら九州全域から広島あたりまで就農で探しましたが、どうも見つからない…。そんなとき、阿南町に別荘のある知人がお知り合いを通じて阿智村役場を紹介してくれたんです。他の市町村ではさんざん資金について尋ねられたり、営農の難しさを説明されたりでしたが、阿智は担当の方が寛大だったのかな…。それに、有機農法で指導を仰げる環境で

あつたことも大きいかもしません」  
品川 「彼が阿智に暮らすことに決めたと聞いて、研修中の休暇を使つて遊びに行きました。信州といつても北アルプスの山ばかり登つていたので南信には縁がありませんでした。が、阿智村が大学時代を過ごした名古屋と実家がある東京の間に位置していること、気候が野菜栽培に向いていて景色がとても良くて、そしてなにより人がとても温かく、そしてなにより人がとても温かい! 気心の知れた仲間が近くにいたら、よりおもしろいことができるかもしれません! そう思つて、1ヶ月ほど通つて自分も阿智村への移住を決めました」

「いろいろなものを、農」と組み合わせることによって、農業や阿智を多くの人に身近に感じてもらえたならなあと思つています。(品川)

「少量多品目でじかにお客様に届けるスタイルを大切にしています。家の周りの農地を中心、年間で60~70種ぐらい作つていて、どうか。就農1年目から名古屋で週末に開かれているオーガニックマーケットで、お客様と一緒に会話しながら販売しています。

職業は?と聞かれるとき、「百姓」と答えていました。百姓って農業だけにとどまらず何でもやる。生きること、暮らすことすべてが職業というイメージ。今の自分は、まさに暮らし 자체が生きることそのものですから。ふたりの子どもたちは2歳と、5ヶ月。この子たちがこの地で何を見て、どう育つていくのか楽しみにしているんです」



兄である品川聖さん(ヴィオラ・ダ・ガンバ奏者)のコンサートを企画したり、2015年からは『阿智ファームライフ』を企画するなど、精力的なアクションを続ける品川さん。

「この地域に暮らし続けながら、自分の想いや阿智村の魅力を発信し続けていきたいと思っています。農業だけではなく、自分のやっていることに興味を持って畑に来てくれる人が本当に嬉しいです」東京都出身

「何農家ですか?と尋ねられたときには、自分はこの作物で勝負しますというものを持ちたいと思っています。やるならその作物で日本になりたいと思いつつ、この阿智村という場所の気候や標高を最大限に生かすことができると、ズッキーニ」を選びました。出荷時期の長さ、色や形の豊富さ、出荷量、



空き家だった古民家で暮らす小塚さん一家。「初めて来たときは畑に入っていく道がわからなくらいうっとうとしていました。農業をやりたい、と漠然と考えている人は大規模農業をイメージしているのかもしれません、品川くんのようなやり方もあり、わが家の必要な機械や資材も使わない小さくてコンパクトな農業といういろいろな選択肢もあることを知ってほしいですね」愛知県出身

りながらワンドアーフォーゲル部で出会った山好きのふたり。私も山が大好きになり、三俣山荘という北アルプスにある山小屋で3シーズン働きました。4ヶ月の短い営業期間で四季のうつろいを感じることができます。山小屋での食事は冷凍がメインでしたから、やはり働いていた経験があるのも興味深い。

小塚 「標高の山小屋で働いて4年目頃だったでしょうか、楽しいけれど家庭を持つたら続けられる仕事ではないなと感じました。山小屋での食事は自分で作つて、自然の中で生活できると自分が先に農業があつたわけです」

品川 「わが家は、両親が音楽家であつた山好きのふたり。私も山が大好きになり、三俣山荘という北アルプスにある山小屋で3シーズン働きました。4ヶ月の短い営業期間で四季のうつろいを感じることができます。山小屋での食事は冷凍がメインでしたから、やはり働いていた経験があるのも興味深い。

指定のサイズなど、オーダーすべての要望に応えたいと思って栽培していました。また、自分が企画したライブや兄のコンサート会場で栽培した野菜を販売しています。食と芸術つてとても繋がりの深いもの。いろいろなものをしていました。農業や阿智を多くの人に身近に感じてもらえたならなあと思つています」

事として働きたかったのですが、季節労働であるゆえの不安定さもあり、続けるかやめるかとても悩みました。四季の変化を肌で感じながら自分を表現することができます。農業が素晴らしい仕事をと思い、有機農業が盛んに行われている埼玉県小川町で農業研修を受けることにしました」





## 阿智家族

小池 忠臣さん(53)



## 阿智家族

下原 大介さん(34)

「10年余り、飲食とは畠違いの飯田市内の光学系企業でサラリーマンとして働いていました。転機となつたのは店をやっている父が体調を崩したことです。やめると言い出した父の姿を見て、やっぱりこの店をなくすのは惜しいと思ったんですね」

国道沿いに南国飯店が開店したのは、今から約40年前のこと。東京のホテルで料理人として働いていた大介さんのお父さんが、当時恵那山トンネルの工事関係者のための飯場がない…と声を聞き、帰郷して開店して以来、地元の中華料理店として永く愛されてきました。

店を経営で転職して3年。「いちばん強く感じたのは、地元に暮らしながら、地元のことをあまりにも知らないこと。会社をやめてから、阿智の人たちのつながりの深さを改めて知りました。メニューを一気に変



えたい気持ちもあるけれど、この店の味が求められているうちは、大きく変えることはないでしょうね。少しずつ新しい取り組みもしていく予定です」

南国飯店の看板メニューといえば、チャーシューメン。創業以来つづく鶏がらと野菜のあっさりスープは、飽きのこない味で女性にもやさしい。ホテルの厨房で作っていた味とのギャップに、当初はお父さんはとまどいも多かったとか。



頃には、大豆を挽いてから学校へ行ったものです。長田屋のとうふは、やっぱり清内路の水あってこそなんですね。水との相性がとうふづくりのすべてだと思います」そう語るのは店主であるご主人の小池忠臣さん。

深夜午前2時に始まる作業は、午前7時には仕上がり、8時にはパッキングされて市内や昼神温泉へ配達され



清内路の何軒か合同で民泊を受け入れている。小池さん宅もそのひとつ。つりの人に、歴史に興味のある人、何度もリピートする人…。定住をとるのではなく、まず地元へ来て理解してもらうことが大切、と語る。

南木曾と伊那谷を結ぶ清内路峠に、旅籠兼酒屋として創業して135年。今や長田屋といえば、市内だけでなく県外の常連さんや旅館のマイクロバスが続々と乗り付け、手づくりどうふや油あげを買っていく人気店だ。

「とうふを作り始めたのは祖父の代で約80年ほど前。自分も中学高校の



とうふ製品だけでなく、酒類から魚や地元野菜、菓子なども販売する地元でたつた1軒の“老舗コンビニ”としての一面を持つ。かつては薪で行っていた作業も、機械を導入し5人体制で約500丁ほど作れるようになった。

農業を魅力ある産業として  
理解してもらいたいし、  
消費者に届けていきたいと  
思っています。

農業はマンパワーです。

専業だけでなく兼業であれ  
法人であれ、関わり方はど  
んなパターンでもいいから、  
田んぼや畑など現場に入る  
人を増やすことが肝心だと  
思っています。



### 農業といつても普通の企業と同じ「経営」なんです

大学を卒業後、足かけ12年にわたって農業支援を行うNGO団体に所属し、海外からの農業研修生に対して支援活動を行っていた高坂友三さん。研修センターのある四国から地元阿智に帰つて8年になった。

「環境に左右されやすい単一作物の大量生産ではなく、多くの品目を少量ずつ生産する少量多品目のスタイルで生産しています。両親は他の仕事をしながらの兼業農家でしたので、家業を継ぐというかたちで地元に戻ったわけではありません」

現在はパートとして手伝ってくれる



スタッフの他に、就農を目指す人たちも幅広く受け入れ、指導やアドバイスを行っている。

「事業計画をたて、パートさんの配置や業務分担を決める。農業といつても普通の企業と同じ「経営」なんです」とか汚い…といったネガティブなイメージではなく、魅力ある産業として理解してもらいたいし、消費者に届けていきたいと思っています。だからこそ経営として成り立つかどうかを実践していくしかないですから…」



高坂家は3世代8人家族。大学時代の同窓生である妻のつかさんは、4人の子どもたちのお母さんであるとともに「農業経営」を支える友三さんの最強のパートナーでもある。年間約60種を生産している。

### 子どもが一緒にやりたいと 言つてくれるような農業を確立していきたいですよね

2015年9月に発行された自治会だより『ごか』に掲載された長男・悠太郎くんの作文には「しよう來の夢」と題してこんな想いが綴られていました。

ぼくのしよう來の夢は、農家になることです。ぼくのお父さんは農業をしています。ぼくも夏休みに、朝と夕方、きゅうりのしゅうかくを手伝いました。ねむかつたり、つかれたりして大変だったけど、お父さんたちの手伝いができたうれしかったです。ぼくは、この阿智村で、お父さんやお母さんに、農業のことをいろいろと教わりたいです。そのためには、まず失敗してもくじけない強い心になることが大切だと思います。(一部抜粋)

### 田んぼや畑など 現場に入る人を増やすことが肝心

「農業はマンパワーです。専業だけでなく兼業であれ法人であれ、関わり方はどんなパターンでもいいから、田んぼや畑など現場に入る人を増やすことが肝心だと思っています。阿智の中でも、加工用の原料野菜等、需要はあつても生産する人がいないという現状があるのも事実です。うちでもできればいいのですが、自分のスタイルである有機農業の制約もあり、ジレンマを感じることもあります」

いろいろな農業に関わる人でもっともっと夢のある話をしたい、と語る友三さん。魅力ある産業としての農業へれど、農業の挑戦は、今日もつづく。



「会社勤めだと自分  
の父親がどんな仕事を  
しているか  
なかなかわ  
からないけ  
れど、農業  
は基本的に

自分を持ちつつ、  
地域にも従う。  
死ぬまでやつてこそ  
思つているんです。



移住当時、ご主人の健次さんはパンとは無縁の研究職! 智子さんは子どもの頃からパンを焼くことが好きで、パン屋さんで働いていたこともあった。「こうなるために働いていたのかも…と思うと何か運命的なものを感じます」

大胆な決断だったとはいっても、ここなら  
丈夫という直感があつたのだそう。  
「3人の子どもたちはみな、こちら  
に来てから生まれました。それまでと  
は環境も習慣も違いますから、最初  
はとにかく地元の方のやり方を見習

愛知県出身の佐久間健次さん・智子  
さん夫妻が営む治部坂高原・峠のパン  
屋『キッチンストーブ』。自家製天然酵  
母・パンを求めて、近隣の飯田市はもち  
ろん愛知、岐阜、静岡などから車を駆  
つて来る人が後をたたない。

「平成4年ごろ、阿智村に畠を借り  
て月に1回はこちらに来るようにな  
りました。畠作をして、気に入ったパン  
屋さんに立ち寄って帰るのが楽しみだ  
ったのですが、事情があつてパン屋さん  
が閉店。誰かいい人はいないかと探し  
ていたんです。もともと自然の中で暮  
らせたらしいな…と思つていましたか  
らパン屋をしながらなんとかなるので  
は、と移住を決めました」

「今年はずっと愛知県境で林業を行  
つてきました。水を蓄え環境を作るの  
は森林です。人が入らないと森林は荒  
れてしまします。木を伐つて間引くこ  
とで周りの木を生かす。山を生かし  
できるようにしたい」と語る。

院では環境学を専攻し、『地域おこし  
協力隊』の第三期生として阿智村にや  
ってきてから5年めとなつた。現在は家  
族とともに清内路に暮らし、自宅近く  
の古民家を借りて「清内路の知恵や  
暮らしの術(すべ)」をここを拠点に共有  
できるようにしたい」と語る。

「自分のやりたいことができるし、  
選択肢もたくさんある。一方で「Iターン  
の人は…」とひとくくりにされると  
嬉しいこともあります。覚悟がないと  
すぐに心が折れてしまうかもしませ  
ん。自分を持ちつつ、地域にも従う。  
自分は、死ぬまでやつてこそその地域お  
こしんだと思っているんです」本柳寛人  
さんの言葉は、力強く熱い。

生まれも育ちも湘南茅ヶ崎。大学

で、生かされる。再生可能な山を増や  
したいのです、林業は奥が深く日本に  
は欠かせない職業だと感じます」



阿智家族

本柳 寛人さん(30)



「ここに生きてきた人に子どもを産み  
育ててほしい」そう望んでいたところ、  
縁あって地元清内路出身の恵さんと  
結婚した寛人さん。10月には予定より  
早く第二子となる樹人(みきと)くんが  
生まれたばかり。



「豆からは油が多くて焚きつけにいいんですよ」と  
囲炉裏に手際よく火を入れる。「清内路の知恵や  
暮らしのすべてをこの古民家を拠点に共有できるよう  
にしたいんです」天井いっぱいに立ちこめる煙が、  
情熱とともに再びこの家に新たな歴史を刻んでゆく。

定住には  
ふたつの基盤があると  
考えています。

ひとつは生活の基盤。  
そして  
地域の基盤です。



金子 智行さん(40)

「名古屋では地域としてのコミュニティはないに等しかった。伍和は集落として、家族構成まで全部知っています。見ていないようでも見えてくれて必要なときは助けてくれるんです」



2015年4月下旬。満開の桃花のもとで二組の家族の撮影が行われた。定住促進事業『阿智家族』のイメージ撮影のモデルとなつたのは、阿智村役場・協働活動推進課で自ら定住促進を担当する河合一成さんの家族。

「まず阿智村を好きになつてもらおう。そしてここを"ふるさと"として暮らしつづけてもらわなければ本当に定住とは呼べないと思っています。それはIターンでもJターンでも同じなのです。阿智村を出ていている者の視点として実感しています」

高校卒業と同時に村を離れ、大学卒業後は公共放送の技術職として慌

ただしくは暮らせないと想います。いつたん溶け込んでもらえば隔たりなく接していますし、要はその場所での暮りに前自治会長さんに事務局をやらないか?とお声がけいただきました」「厳しい言い方になつちゃうけど夢だけでは暮らせないと想います。いつたん溶け込んでもらえば隔たりなく思います。消防団には年齢的に入れなかつたので何か地域との繋がりと貢献できることはないか?と考えていたところです。ひつは生活の基盤。そして地域の基盤です。地元の自治会活動に参加するのは、まさに地域の基盤そのもの。その両方あつての暮らしだと思いません。消防団には年齢的に入れなかつたので何か地域との繋がりと貢献できることはないか?と考えていたときに前自治会長さんに事務局をやらないか?とお声がけいただきました」

土曜日の夜、阿智村伍和(ごか)地区の公民館会議室に金子智行さんの姿があった。愛知県から農業をするために阿智村に移住して4年。現在、伍和自治会の事務局を担当している。



阿智村役場の協働活動推進課 定住促進係は、定住のPRや相談窓口だけでなく住宅新築の支援金や村営住宅の運営、空き家改修等の補助金、就農など阿智村で暮らすこと、生きることのベースを広くバックアップしている。

ただしくも充実した日々を送っていた河合さん。「いつかは地元に戻るかもしれないとは思つて、いた自分を決意させた転機は、子どもが生まれたことでした。子どもが成長する過程で、来年はどこで生活しているのかわからぬ暮らしは自分に向いていないような気がして、戻るなら今しかないのかな」と役場の採用試験を受けたのです。自分の生き方や考え方と共に感してくれたことをきっかけに、「河合さんに出会って阿智村に暮らしつづけたくなった」と言つてもらえる日が来るとうれしいですね」



らしさ繋がりが心地いいと思えるかどうかなんじやないかな?」そう現自治会長の河合さんは語る。「小3で転校してきた娘が、まさか友だちを作つて溶け込んでくれたのがありがたかったですね。自分は20代から移住して就農したいという予定を持つて働き、ある程度の蓄えをしてからこちらにきました。それでもおそらく農業だけで食べていけるのはあと何年かかる。なんとか安定させて阿智の農地を守つていいようにしたい。子どもにはここが自分のふるさとだと思つてほしいですからね」

## 日本一の天空の楽園へ、ようこそ。



### 浪合はまたとない環境

舞と和太鼓のプロとして活動する

井上晶子さんが浪合地区に移住したのは、1年前のこと。

「実家は三重です。幼い頃から家族で伊那の田楽座に太鼓や舞を稽古に来ていたので、伊那谷は全く知らない場所ではありませんでした。当時暮らしていた仙台を離れてソロ活動をすることになりどこを拠点にしようかと考えていたとき、阿智で活動していた『地域おこし協力隊』メンバーと知り合ったのです。太鼓をいつでも鳴らせる、舞を思う存分稽古できる条件をえたとき、浪合はまたとない環境でした」

太鼓をいつでも鳴らせる、舞を思う存分稽古できる。

そのうえ星のガイドとして人とつながれる。  
私にとっては理想的な環境で自己実現できつあるんです。



浪合神社秋季祭典にて。尹良親王を祀る浪合神社の舞台では、浪合神社にちなんだ尹良親王の神楽を初演した。



sva.jp/まで  
◎くわしい情報は・スター・ビレッジ・阿智

ス ター・ビ レッジ・阿 智  
智 村は、  
環 境省認  
定の「星が最も  
輝いて見える場  
所」第一位に選  
ばれた日本の星空の村。

全長2,500メートル、高低差600メートルを「ゴンドラで登ること約15分。標高1,400メートルに位置するハブンスそのはらを会場に行われる「天空の楽園日本一の星空ナイトツアー」は、設置された照明を二枚に消灯した瞬間、まさに天空の楽園と呼ぶにふさわしい満天の星々が迎えてくれる。

2012年から始まったこのナイトツアーは、年々各メディアでの取材や特集が相次ぎ、4年目となつた2015年のシーズンは1晩で数千人が満天の夜空を堪能することもあつたほど…。

期間中は場内いっぱいに天体望遠鏡を並べた天体観測イベントや、大人気の星のお兄さんによるスター・ライトライブ、キキフラを親善大使に迎えたイベントが行われ、年齢を問わず星空を身近に楽しむことができる。



阿智家族

井上 晶子さん